



金子家文書（群馬県立文書館収蔵）

追神湯の事并詠歌付圓珠姫の事  
追神湯の事并詠歌付圓珠姫の事

此追神の湯は神代に赤城大明神と曰光大権現に神軍ありし時明  
女追神の湯は神代に赤城大明神と曰光大権現に神軍ありし時明

神流矢に當らせ玉い引退せ給いし故此の所を追神と云也初明神  
神流矢に當らせ玉い引退せ給いし故此の所を追神と云也初明神

御弓の筈にて地を掘せ給えは妙湯忽涌出たり此湯にて御疵を  
御弓の筈にて地を掘せ給えは妙湯忽涌出たり此湯にて御疵を

洗わせ給えば即ち平癒まし／＼ける 永禄の春の頃 顯恭の御  
内室お曲輪の御前 入湯まし／＼ける折節 追神と云名を老が身に  
準て読める  
準て讀む

谷ふかみたへぬ松風 浪の音 唯さびしきは老が身ぞかし

と詠し給ひ 御供の女房達にもつれ／＼を訪ひたまへと仰ければ  
発知薩 摩守の女方

わかからは又見んことも片品の老が身の湯は 今ばかりこそ

河田四郎娘 圓珠も

なからへて又見ん事 も片品の 淵の汀の老が身の湯を

と詠し 歌の様に候わすと申しける此圓珠と云し女房は歌人の

名世上に知られたり 或時 龍田の紅葉を詠る

龍田山 紅葉をわけて入る月は 錦に包む 鏡なりけり

されは此歌達 天間 忝も一首の御製を宣る

上野や沼田の奥に円なる珠の有とは 誰か知るべき

此御製に依て 圓珠と名付 其外 破れ 又あり

又あり



鳥もなく 鏡もなからん里もがな二（破れ）夜のかくれ家にせん  
ももろく 鏡もあかりん里もがな二  
夜乃かきき家よせん

喜陳按にこの歌は古歌に あり疑は 傳写の誤ならんか  
喜陳按にこの歌は古歌に あり疑は 傳写の誤ならんか

暫らく 記し置後の君子正し玉へ  
暫らく 記し置後の君子正し玉へ

月影は 木の下モトごとトに村きえて踏に跡なき 庭の白雪  
月影は 木の下モトごとトに村きえて踏に跡なき 庭の白雪

いとよわき梅の匂ひの花ころも春よりさきにほころひにけり  
いとよわき梅の匂ひの花ころも春よりさきにほころひにけり

石墨ズミに硯田そへて筆もかな戸かみに書て君に見せはや  
石墨ズミに硯田そへて筆もかな戸かみに書て君に見せはや

立よりて影も移さん  
立よりて影も移さん  
石墨 硯田 戸神  
石墨 硯田 戸神

流れては浮世に出る 谷川の水  
流れては浮世に出る 谷川の水

又座當 物語 と云事 を作られける  
又座當 物語 と云事 を作られける

或山に児達 三人御座つて四十からをかわせ給ふ 春雪降りて  
或山に児達 三人御座つて四十からをかわせ給ふ 春雪降りて

殊外さへかへりたるに彼小鳥むなしくなりぬ児達 惜ませ給い  
殊外さへかへりたるに彼小鳥むなしくなりぬ児達 惜ませ給い

悲に絶す手つから雪仏 を作りとむらわせ給う  
悲に絶す手つから雪仏 を作りとむらわせ給う

雪仏 造りもあへず 罪消えて落るしつくはアノクタラク  
雪仏 造りもあへず 罪消えて落るしつくはアノクタラク

作る人みな極樂へ雪仏 罪もむくいも消て跡なし  
作る人みな極樂へ雪仏 罪もむくいも消て跡なし

氷をば座 像になすや 雪仏 あられや玉のかざりなるらん  
氷をば座 像になすや 雪仏 あられや玉のかざりなるらん

又猿物語を  
又猿物語

天竺の猿唐土猿日本の猿三疋寄合ていさや熊野へ参らん  
天竺ノ猿唐土猿日本ノ猿三疋寄合ていさや熊野へ参らん

尤とて物語の出立仕熊野へ参り本宮清浄殿の御前に  
尤とて物語の出立仕熊野へ参り本宮清浄殿の御前に

七日通夜仕り満ずる 暁空より物がづつしりとつと落る 猿共  
七日通夜仕り満ずる 暁空より物がづつしりとつと落る 猿共

驚き 何しやらんと思つてかいさぐり見てあればまはり七かい  
驚き 何しやらんと思つてかいさぐり見てあればまはり七かい

斗あるくりにてぞ候る猿共せんきしけるは此栗わつてとつ  
斗あるくりにてぞ候る猿共せんきしけるは此栗わつてとつ

ても差なし 歌をよみ歌の増する方へ一所につけん然る  
ても差なし 歌をよみ歌の増する方へ一所につけん然る

べしとて先天竺の猿の歌は  
魚もて先天竺の猿の歌は

西方の弥陀を念するその人も数珠くりからにて仏とはなる  
西方の弥陀を念するその人も数珠くりからにて仏とはなる

唐つちの猿の歌に  
唐つちの猿の歌に

西の海 千尋の底に引く綱も縄からくりて魚ぞ入ます  
西の海 千尋の底に引く綱も縄からくりて魚ぞ入ます

日本の猿の歌に  
日本の猿の歌に

武士のうはやにさせる かふら矢も中くりからにて音ぞなります  
武士のうはやにさせる かふら矢も中くりからにて音ぞなります

歌に於ては増劣なし いざ年くらべして 年の増したる  
歌に於ては増劣なし いざ年くらべして 年の増したる

その方へ一所に付んとて先天竺へ破れ 須弥山ケシ程有りし時  
その方へ一所に付んとて先天竺へ破れ 須弥山ケシ程有りし時



生まれりと申す唐土の猿は大海（破れ）程有りし時生まれり

と申す日本の云へき事があらされはあなたへむいてもの

不云 こなたへ向くももの不云目しはたたき口あくくと打

はかみてぞ居たりける天竺の猿唐土の猿いかに日本の猿

どのは此一句にはつれ兼おくしたる色見えぬ其儀ならは

熊野権現諏訪八幡のがすましとて太刀の柄に手をかけた

日本の猿是をみてあらけうくしの有様や此一句はおけ干

句にもはつれかね申さず我れは須弥山ケシ程有し時大海

硯水程有し時八百八十六ツ<sup>ナカラ</sup>半になる彦猿一ツ失ひしか

只今の様に思ひ出されてものも申されずと云ければ初は

日本の猿殿は我らが中の古老にてましますとて此くりを

日本の猿とのへ奉る日本の猿悦ひ此くり請取まさかり八挺に

てとのめうち三百六十五尋ありける大縄引付山の猿共呼下し

おのれ木やりして山て引くは大い持海て引くは縄て

里て引けは横雲えいさらやさらと七日七夜に比叡山坂元



さて引付 山王へ奉る山王不斜御感 有て 天の菩提酒を  
おと付付山王へ奉る山王不斜御感 有て 天の菩提酒を  
三々九度ぞ被 下ける其時の九盃の 酒に猿面まつかに  
にて九度ぞ被下ける其時の九盃の 酒に猿面まつかに  
成りたる物語り猶又一処に赤き所も有けに候と  
成りたる物語り猶又一処に赤き所も有けに候と

作られける此圖 珠若かりし時陶田 弥兵衛 信州浪人 と云し人に嫁し  
作られける此圖 珠若かりし時陶田 弥兵衛 信州浪人 と云し人に嫁し

三年を送りけるに彼 弥兵衛古郷に老母 有けれども便りも  
三年を送りけるに彼 弥兵衛古郷に老母 有けれども便りも

せず案したる 気色もなく只とうかくと打過ぬ 圓珠 うと  
せず案したる 気色もなく只とうかくと打過ぬ 圓珠 うと

ましき事に おもひ御身不孝の人也 我をいか程思ひ玉う  
ましき事に おもひ御身不孝の人也 我をいか程思ひ玉う

ともたのもしからす 三綱の中にも第一は親子の 道也 諸罪  
ともたのもしからす 三綱の中にも第一は親子の 道也 諸罪

の中にも不孝より大ひなる 罪はなし然るに御母公の 御事  
の中にも不孝より大ひなる 罪はなし然るに御母公の 御事

思召出されす 事の 天命に 背給わん事 浅ましとかく申さば  
思召出されす 事の 天命に 背給わん事 浅ましとかく申さば

とて我二心なし 當摩の後を追候へし 是偽にあらずと  
とて我二心なし 當摩の後を追候へし 是偽にあらずと

誓紙 を書一卷の 書を作り 見せたり後に 其の書を 圓珠  
誓紙 を書一卷の 書を作り 見せたり後に 其の書を 圓珠

集と名付たり 寛永の頃まで世に流 布したり 当時 尋しに  
集と名付たり 寛永の頃まで世に流 布したり 当時 尋しに

なし 扱弥兵衛は 妻女の 諫言にて 古郷へ行 老母に孝行を  
なし 扱弥兵衛は 妻女の 諫言にて 古郷へ行 老母に孝行を

盡しけるか 一年程過ぎて 老母果たり (破れ) 念頃に 取置沼田へ立  
盡しけるか 一年程過ぎて 老母果たり (破れ) 念頃に 取置沼田へ立



帰り旧宅へ入て見ければ古に住し（破れ）がわり床には釋迦三

尊十方三世の諸仙名号かけ並へ圓珠は髮喝食の如くにして  
墨の衣に掛蘿をかけたり 香の煙り薫して中スルドク貴ぞ覚  
無イカテの衣に掛蘿をかけたり 香の煙り薫して中スルドク貴ぞ覚

弥兵衛此様を見て女人さへ此の如し男の身として争イカテか思ひ  
切さるべきとて剃髮染衣の姿となり諸国修行したりける其頃

関八州の管領として瀧川左近将監勝益 厩橋に居城したりける瀧  
川儀太夫甥也 勝益 沼田城代たるに依て 勝益 圓珠の事を聞 及び厩橋

依て瀧川北条と一戦に 打負け直に上洛したりければ忽国乱  
となりける 圓珠其折から大病を 請歩行不叶 城中に打伏す北条

とのいかなる者ぞ尋給へは圓珠と答えければ扱は聞及ひし 歌人也  
誠の 圓珠 なれば歌詠候らへ命 を助んと有ければ此大病にて詠

歌の 事おもひよらず候へども何にても題を 給り候へと云ければ  
二三四と望玉ふ 圓珠とりあへず

いかにせん恋しき方の章タマツサに詠れぬもじのニツ三ツ四ツ

いかにせん恋しき方の章タマツサに詠れぬもじのニツ三ツ四ツ

いかにせん恋しき方の章タマツサに詠れぬもじのニツ三ツ四ツ

いかにせん恋しき方の章タマツサに詠れぬもじのニツ三ツ四ツ

いかにせん恋しき方の章タマツサに詠れぬもじのニツ三ツ四ツ

いかにせん恋しき方の章タマツサに詠れぬもじのニツ三ツ四ツ

と息絶えくくに聞へければふびんなりし事也思ふ方へ送り給わんと  
給へければ沼田古郷に候へばなつかしく思ひ候と有ければさらは沼田へ  
送れとて付くの者共懇ろにして送けるが重病なれば道にて絶に

空く成にける女性なれとも智文才覚世の人に勝れたり愚かなる

物語書 記事後代に云失へるにより爰に書集る也

物語書 記事後代に云失へるにより爰に書集る也